

# 認知症サポーター養成講座の効果と課題

## ～静岡県御殿場市での取り組み～

榎木 博之

### 1、はじめに

日本の高齢化率は21%を超え、「超高齢社会」に突入している。今後の人口予測では2055年には高齢化率40%を超えるとも言われている。<sup>1)</sup>このような高齢化の進行と共に、社会問題になっているのが、認知症高齢者の増加である。日本で認知症高齢者が「現在169万人であるが今後20年で倍増することが予測されている」<sup>2)</sup>また、家族構造の変化から、65歳以上の世帯では単身及び2人暮らしが増えている。<sup>3)</sup>この状況は認知症高齢者を家族のみで支えていくことが困難になり、今後は地域全体で支えていく必要性が生じてきていると言える。認知症は今、社会問題として取り組まなければならない課題になっているのである。この課題に対して、国で、そして各地域でさまざまな取り組みが行われている。その一つが「認知症サポーター養成講座」である。本論では、静岡県御殿場市での認知症サポーター養成講座の活動を報告し、その効果と課題について考えていきたい。

### 2、認知症サポーター養成講座とは

認知症サポーター養成講座は、2004年に「痴呆」から「認知症」と呼称が変更された翌年、「みんなで認知症の人とその家族を支え、誰もが暮らしやすい地域をつくっていく運動『認知症を知り地域を作る10ヵ年』のキャンペーン」<sup>4)</sup>の一環として、全国各地で行われている。このキャンペーンは「認知症を理解し、認知症の人や家族を温かく見守り、支援する認知症サポーターを1人でも増やし、認知症になっても安心して暮らせる町づくりを市民の手で展開するものである」<sup>5)</sup>地域単位で「認知症サポーター養成講座」を開催し、認知症サポーターを全国で400万人養成していくことを目標としている。そして養成講座を受講すれば、認知症サポーターになった証として「オレンジリング」を受け取ることになっている。サポーターになった人はこの「オレンジリング」を腕につけ、認知症の応援者として地域で活動していくことが求められる。この養成講座、地域住民だけに留まらず、銀行やスーパーといった企業で、そして小中学校といった教育機関などで幅広く行われている。2009年5月31日現在、全国各地で1,004,491人のサポーターが養成された。<sup>6)</sup>当初は2009年までに100万人を目指していたが、5月の時点で目標を達成したのである。

静岡県下においても、認知症サポーター養成講座は各市町村で積極的に行われている。2009年5月現在で、静岡県下では36,432人のサポーターが養成された。<sup>7)</sup>御殿場市でも、平成18年

度から積極的に活動を展開してきたので、次章にてその取り組みを報告したい。

### 3、御殿場市での活動報告

御殿場市においては平成21年7月現在までで合計38回、認知症サポーター養成講座を開催し、2,535名がサポーターの証「オレンジリング」を受け取っている。御殿場市では、筆者を含めた3人のキャラバン・メイトの講演と「劇団にんじん」による寸劇という二本立てで行うことが多い。講義だけではなく、寸劇を行うため市民が認知症を楽しくまた分かりやすく学ぶことができている。御殿場市での活動は表1のとおりである。平成18年、19年当初は、キャラバン・メイトや地域包括支援センターから呼びかけを行い、講座を開催してきた。しかし平成19年後半以降、参加者から口コミで情報が伝わり、地域住民や各種団体、法人等からの開催要請が増えていった。その成果により、表2のように年々開催回数と参加者が増加している状況である。

講座の参加者は、地域単位で行うことが多いので、地域住民が中心になっている。しかし平成19年11月に初めて中学校で、平成20年4月には看護学校と教育機関でも行った。また平成20年11月には、警備会社からの依頼があり企業の職員を対象に行うことが出来た。参加者を年代別で見っていくと、10歳代9%、20歳代4%、30歳代5%、40歳代8%、50歳代17%、60歳代38%、70歳以上19%になる。一度中学校で行ったことがあるため、10歳代の参加者が若干多いが、全体的には60歳以上で半数以上を占めている。10歳代から30歳代の参加者をいかに増やすかが今後の課題になっている。

(表1) 御殿場市認知症サポーター養成講座開催状況

回数	実施年月日	内容	対象者	参加人数
1	平成18年8月25日	ビデオ・講義	民生委員	146人
2	平成18年10月11日	講義	ソーシャルワーカー等	15人
3	平成19年3月24日	講義・寸劇	介護支援専門員、市民等	144人
4	平成19年7月10日	講義・寸劇	県東部民生委員	450人
5	平成19年7月14日	講義	地区住民	38人
6	平成19年10月5日	講義・寸劇	地区住民	39人
7	平成19年10月25日	講義・寸劇	運転ボランティア	28人
8	平成19年11月21日	講義・寸劇	地区住民	70人
9	平成19年11月17日	講義・寸劇	中学校	181人
10	平成20年2月9日	講義・寸劇	市民公開講座	41人

11	平成20年3月14日	講義・寸劇	地区住民	31人
12	平成20年3月27日	講義・寸劇	市民公開講座	42人
13	平成20年4月15日	講義・寸劇	地区住民	71人
14	平成20年4月17日	講義・寸劇	看護学校	40人
15	平成20年5月9日	ビデオ・講義	市民グループ	12人
16	平成20年5月30日	ビデオ・講義	市民グループ	20人
17	平成20年6月5日	講義・寸劇	地区住民	39人
18	平成20年6月26日	講義・寸劇	地区住民	21人
19	平成20年6月27日	ビデオ・講義	訪問介護従事者	10人
20	平成20年7月2日	講義・寸劇	小・中・高等学校教員	36人
21	平成20年7月10日	講義・寸劇	地区住民	35人
22	平成20年8月22日	ビデオ・講義	市民グループ	15人
23	平成20年10月4日	講義・寸劇	市民公開講座	40人
24	平成20年10月11日	講義・寸劇	市民（社会福祉大会）	527人
25	平成20年10月31日	講義・寸劇	地区住民	42人
26	平成20年11月5日	講義	いきいきデイ	25人
27	平成20年11月22日	講義・寸劇	市民（看護協会）	78人
28	平成20年11月26日	講義・寸劇	地区住民	40人
29	平成20年11月27日	講義・寸劇	警備会社	7人
30	平成20年12月6日	講義・寸劇	地区住民	72人
31	平成21年2月22日	講義・寸劇	福祉施設職員	21人
32	平成21年2月26日	講義	地区福祉推進員	32人
33	平成21年2月27日	講義・寸劇	市民グループ	43人
34	平成21年3月5日	講義・寸劇	福祉施設職員	28人
35	平成21年4月14日	講義・ビデオ	訪問介護員	15人
36	平成21年4月23日	講義・ビデオ	訪問介護員	10人
37	平成21年5月10日	講義・寸劇	福祉施設職員・利用家族	46人
38	平成21年6月6日	講義・寸劇	市民公開講座	57人

(表2) 御殿場市年別実施状況

開催年	回数	参加人数
平成18年	2回	161人
平成19年	7回	950人
平成20年	21回	1,172人

#### 4、アンケートから見えてきたこと

これまで講座終了後には、アンケートを実施してきた。アンケート用紙は講座の資料と共に配布し、講座の終了後に記入し回収を行った。倫理的配慮として、アンケートへの協力について口頭にて説明、同意を得た上で実施している。今後の認知症サポーター養成講座の活動方向を検討する資料にするため、平成20年7月以降アンケートの書式を統一した。書式が統一されてから行った認知症サポーター養成講座のうち、市民を対象にした8回をまとめ、KJ法にて分析を行った。

調査方法は以下のとおりである。

- (1) 調査対象講座 平成20年7月～平成20年12月まで、市民を対象に行った講座8回
- (2) 回収方法 講座終了後アンケート用紙に記入しその場で回収を行う
- (3) 回収率 34.3%

(内訳 講座参加者人数870人 アンケート回収人数 298人)

- (4) 回答者年齢別人数  
10歳代1名(0.3%) 20歳代10名(3%) 30歳代15名(5%)  
40歳代27名(9%) 50歳代50名(17%) 60歳代99名(33%)  
70歳代92名(31%) 80歳代3名(1%) 無回答1名(0.3%)
- (5) 分析方法 KJ法にてカテゴリー化
- (6) アンケート内容 質問に対して自由記述
  - ① 「認知症」についてのイメージ
  - ② 認知症サポーターとして今後出来ること
  - ③ 今後の認知症サポーター養成講座を行う対象・場所について
  - ④ 劇の感想
  - ⑤ 講座についての意見

アンケート結果については以下のとおりである。

##### ① 「認知症」についてのイメージ

認知症のイメージは、「認知症の症状」「介護者の大変さ」「自らの問題としての認識」「病気」「マイナスイメージ」「プラスイメージ」の6項目に分けられた。その中で最も多かった意見は「忘れっぽい」などの中核症状であった。周辺症状についての意見もあったが、それよりも中核症状をイメージする回答が多かった。また「介護者の大変さ」についての意見もあったが、「自分はなりたくない」「明日は我が身」など自らの問題として捉えている意見が目立った。これは60歳以上の参加者が6割を超える状況が影響していると考えられる。筆者がサポーター養成講座を行う際、参加者に講座に来た目的を尋ねるときがある。認知症の介護方法より予防方法を聞きたい、という声が圧倒的に多い。認知症を自らの問題として捉え、関心を持ち本講座に参加する、という人が増えている証と考えられる。

表3 「認知症」についてのイメージ

項目	具体的内容
認知症の症状	<ul style="list-style-type: none"> <li>・忘れっぽい</li> <li>・何度も同じ話をする</li> <li>・食べたことを忘れる</li> <li>・言葉が出にくい</li> <li>・徘徊</li> <li>・怒りっぽい</li> <li>・無表情</li> </ul>
介護者の大変さ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・介護者・周囲の人が大変</li> <li>・介護していて大変だった</li> <li>・介護者の生活リズムが変わってしまう</li> </ul>
自らの問題としての認識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・明日は我が身</li> <li>・他人事ではない</li> <li>・親がなったらどうしよう</li> <li>・自分はなりたくない</li> </ul>
認知症は病気	<ul style="list-style-type: none"> <li>・認知症は病気</li> <li>・誰にでもなる身近な病気</li> <li>・治らない病気</li> </ul>
マイナスのイメージ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・汚い</li> <li>・恥ずかしい</li> <li>・恐ろしい</li> <li>・危ない</li> </ul>
プラスのイメージ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プライドがある</li> <li>・過去の話をいきいきとする</li> <li>・3回目の講座なのでイメージも明るい方向に変化している</li> </ul>

## ② 認知症サポーターとして今後何が出来ること

「認知症サポーターとして出来ること」については、「認知症の人への接し方」「声かけを行う」「話を聞く」「認知症の理解」「地域の中で出来ること」の5つに分けられた。認知症サポーター養成講座を受講した後なので、参加者が「私に出来ること」を考え、回答している。多かった意見としては「話を聞く」ことで、身近ですぐに出来ることをあげている。また、講座の中で必ず伝えている「認知症の人の杖になる」や、「認知症の人を1人の人として接する」という言葉をそのまま記載している人もいた。「地域の中で出来ること」では、「近所に徘徊している人があるので見守っていききたい」や「民生委員等に情報を提供する」など具体的な意見もあった。しかし一方で、少数意見ではあるが「具体的に何をすればよいか分からない」という声もあった。まだ「サポーター」として何をするのか具体的にイメージが出来ない人も多いことは事実であり、今後の課題と感じている。

表4 認知症サポーターとして今後何が出来ること

項目	具体的内容
認知症の人への接し方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 認知症の人を1人の人として接していききたい</li> <li>・ 脳の病気だということを理解し、人格を否定せず温かく接したい</li> <li>・ その人を尊重し、温かい気持ちで接するようにしたい</li> <li>・ その人のことをまず理解する</li> <li>・ 人として関わることが出来そう</li> <li>・ 本人の気持ちを大切にする</li> </ul>
声かけを行う	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 近所のお年寄りと会話する機会をつくる</li> <li>・ 優しく声かけを行う</li> <li>・ 積極的に声かけを行う</li> <li>・ 隣近所で声を掛け合う</li> <li>・ 「支える杖」になれるよう声かけを行う</li> </ul>
話を聞く	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 話し相手になれると思う</li> <li>・ 聴き上手になる</li> <li>・ 家族で話し合いをする</li> </ul>
認知症の理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 正しく認知症を理解する</li> <li>・ 認知症について勉強したい</li> <li>・ 認知症について関心を持つ</li> <li>・ 周囲の人々にも認知症を理解してもらおう</li> <li>・ 地域で認知症の人を抱えている方がいたら一緒に認知症サポーター養成講座を受けたい</li> </ul>

地域の中で出来ること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・近所に徘徊している人がいるので見守っていきたい</li> <li>・「地域の目」として協力したい</li> <li>・身近なところから支えていけるように意識していきたい</li> <li>・認知症の本人だけではなく、家族にも何かお手伝いがあればしたい</li> <li>・今日の講座を機に協力したい</li> <li>・民生委員等に情報を提供し、適切な対応を求めたい</li> </ul>
------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

### ③ 今後の認知症サポーター養成講座を行う対象・場所について

「今後の認知症サポーター養成講座を行う対象・場所について」では、「地域」「学校」「職場・職種」の3つに分けられた。受講した人の多くが、本講座の趣旨を理解し、この活動を広めていく必要性を感じていた。そのため各地区で市民全体を対象に、また小・中・高校の学校教育の場で、そして銀行・郵便局・スーパーなど高齢者と接することの多い職場での開催の必要性を挙げていた。また「若い人に聞いてほしい」という意見もあった。その他の意見として、講義だけに留まらず「認知症の人と一緒に学ぶ」「皆で話し合いをする場をつくる」などの具体的内容案の記述も見られた。

これまで御殿場市では、各地区で市民を中心に講座を行ってきた。しかし教育機関は中学校1校と看護学校、企業は1社だけしか行っておらず、御殿場市の今後の課題と感じている。

表5 今後の認知症サポーター養成講座を行う対象・場所について

項目	具体的内容
地域	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地区ごとに行っていく</li> <li>・公民館で行う</li> <li>・地域の婦人会</li> <li>・老人会の集会</li> <li>・各地域のいきいきサロン</li> <li>・なるべく身近な所で行ってほしい</li> <li>・身近な所で行うと、大勢の人が講座を開ける</li> </ul>
学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校・高校の福祉活動として</li> <li>・小学校・中学校・高校</li> <li>・子どもたちが集まる所。子どもたちが認知症のことを分かると、認知症の人たちの怪我や事故を防ぐことになると思う。</li> <li>・若い人たちに聞いてもらいたい</li> </ul>
職場・職種	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外を回っている職業の人（郵便局・銀行・ガス会社・農協）</li> <li>・地元の企業に声をかける</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 行政機関・警察</li> <li>・ スーパー、デパート</li> <li>・ 福祉施設、病院</li> <li>・ 福祉施設や病院の職員</li> <li>・ デイサービスで家族も交えて行う</li> <li>・ 民生委員・児童委員</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 認知症の人と一緒に学ぶ</li> <li>・ 皆で話し合いをする場をつくる</li> <li>・ 介護者にも呼びかけ、フォローしていく</li> <li>・ 高齢者に予防を提示するとよい</li> </ul>

#### ④ 劇についての感想

「劇の感想」は、「認知症を理解が出来た」「自分のこととして考えた」「地域で支える必要性」「他の人にも見てほしい」の4つに分けられた。講義だけではなく、劇をとおして「認知症の理解」を深めていると言える。また、劇をきっかけに認知症を考える機会にもなっている。さらに「多くの人にも見てほしい」という意見も多かった。この結果は、劇を行う「劇団にんじん」のメンバーの積極的な姿勢・真摯な取組に多くの人々が共感を寄せているから、とも言えよう。「劇団にんじん」の寸劇は評判が広まり、御殿場市だけではなく他の市からの依頼も増えてきている。劇をとおして「楽しく、そして分かりやすく」認知症を学ぶことが出来るので、今後も劇を交えて講座を行っていく必要性を感じている。

表6 劇についての感想

項目	具体的内容
認知症の理解が出来た	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 認知症のイメージが分かった</li> <li>・ 認知症のことを理解出来た</li> <li>・ 認知症本人の気持ちを考えることの大切さを感じた</li> <li>・ 介護方法、支え方、接し方について学べた</li> <li>・ 認知症の人とどう接していいか分かった</li> <li>・ 自分の接し方の反省が出来た</li> <li>・ 人の助けが必要な病気ということが分かった</li> </ul>
自分のこととして考えた	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 他人事ではないような気がした</li> <li>・ 自分たちもこれから起こりえることだと思った</li> <li>・ 自分もいつかはなるのでは</li> <li>・ 身につまされる</li> <li>・ 人生とは何だろうと考えさせられた</li> </ul>



地域で支える必要性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 隣近所、地域の人々の理解と協力が必要と思った</li> <li>・ 家族、地域で認知症を理解していくことが大切だと思った</li> <li>・ 近所の人に優しく、と感じた</li> <li>・ 家族や近所の人に隠さず話すことが大切と知ることが出来た</li> <li>・ なかなか近所の人々の理解や協力は難しい</li> </ul>
他の人にも見てほしい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 多くの人に見てほしい</li> <li>・ 家族の理解が必要になる。家族で見れたらよい</li> <li>・ 子どもたちにも見せてあげたい</li> <li>・ もっと小さな会場でも行ってほしい</li> <li>・ 大変だけど続けてほしい</li> </ul>

### ⑤ 認知症サポーター養成講座についての自由記述

「認知症サポーター養成講座についての自由記述」は様々な意見があったが、「認知症サポーター養成講座への要望」と「他の人にも講座に参加してほしい」と大きく2つに分けられた。その中でも筆者が気になっているのが「認知症サポーター養成講座への要望」の中にある「もう少し接し方についての話があるとよかった」「認知症の予防方法を聞きたい」「レベルを上げていってほしい」という声である。この回答が、認知症サポーター養成講座を行う上で、大きな課題になっている。キャラバン・メイトとして本講座を企画している側としては、対応法について詳細に説明する時間がない。だからこそ劇をとおして対応法は伝えていきたい、という思いがあった。しかし実際、普段から認知症の方と接している人たちは、それだけでは物足りなく感じてしまう。また「明日は我が身」と考えている参加者にとって、認知症の予防方法は関心的になっている。受講している人は対象が幅広く、認知症の理解についても人それぞれで違ってくる。しかし本講座は、認知症の人と接したことがある人とない人も含めて全体的に理解できる内容が求められる。そのため「もう少し専門的な話を聞きたい」と思って参加している人との間に、ずれが生じてしまうことも否定は出来ない。一方で、本講座を繰り返し受講するリピーターも出てきている。その人たちから「(研修内容の)レベルを段階的に上げていってほしい」という意見もある。認知症サポーター養成講座は、入り口としての活動になるが、その後のフォローアップとして対応法や予防法などを詳細に伝えていく講座も検討しなければならないと感じている。

表7 認知症サポーター養成講座についての自由記述

項目	具体的内容
認知症サポーター養成講座への要望	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講座終了後、個人的に認知症についての質問コーナーがあると良い</li> <li>・もう少し詳しく教えてほしい</li> <li>・講座も段階的にあると良い</li> <li>・レベルを上げて行ってほしい</li> <li>・認知症の予防方法を聞きたい</li> <li>・講座を夜に行ってくれると良い</li> <li>・もう少し接し方についての話があるとよかった</li> <li>・体験談を聞いたかった</li> <li>・時間が短かったのもう少し聞いたかった</li> <li>・講座の存在をもっとアピールした方が良い</li> </ul>
他の人にも講座に参加してほしい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の中で回数を多くしてほしい</li> <li>・今後も広めてほしい</li> <li>・10代、20代の人にも講座を受けてほしい</li> <li>・若い人から年配の人に聞いてほしい</li> <li>・多くの人に参加してほしい</li> <li>・地域に浸透してほしい</li> <li>・これからもっと小さな場で、出前的に行ってほしい</li> <li>・サポーターを増やしてください</li> </ul>
その他の意見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・また受講したい</li> <li>・とてもためになった</li> <li>・身にしみた</li> <li>・基本的な考え方が分かった</li> <li>・講座を受けた人は家族で話し合うと良い</li> <li>・リングをしていざという時に対応できるか不安</li> <li>・認知症の話より、実際に接する機会を合わせると理解が深まると思う</li> </ul>

## 5、認知症サポーター養成講座の効果と課題

これまでの活動についてアンケート結果を参考に振り返り、効果と課題をまとめていきたい。まずは効果について、以下のことが考えられる。

- ① 講座が各地域に広がってきたこと
- ② 参加者の増加、開催以来が継続していることから、市民に「認知症」への関心が高まったこと
- ③ 講座に参加した市民の認知症の理解が深まったこと

#### ④ 教育機関（中学校・看護学校）、企業で行うことが出来たこと

①について、最初の頃は地域包括支援センターから講座の依頼が来るが多かったが、最近では各地区の住民組織から直接の依頼が増え、地区単位での開催が増えている。②について、参加者は4年目で2,500人を越えて、現在も講座の依頼が続いている。そして年々、講座回数、参加人数も増えている状況である。参加者のアンケートの中で「認知症を自らのこととして考えた」という声も多く、そのことが参加人数の増加に繋がっていると考えられる。③については、アンケート結果からも講座をとおして「認知症のことが理解出来た」という記述が多くあった。また、講座の内容で重視していた「認知症の人への接し方」「認知症の理解の必要性」「地域で支える必要性」といったことを参加者が理解し、多くの人がアンケートに意見を寄せている。このことから講座をとおして、参加者の理解が深まったと言えるだろう。④について、中学校で行うことは出来たが、その後の開催が看護学校に留まっている。そのため平成20年7月には、小・中・高校の福祉教育担当教員を対象に実施した。そこに参加した一部の教員から「是非、学校に来てほしい」という声もあり、今後各学校に広げていきたいと考えている。

一方、課題については、

- ① 20代・30代・40代の参加を増やしていくこと
- ② 学校や企業での開催を広めていくこと
- ③ 実践事例を積み上げていき、サポーターの役割を明確化していくこと
- ④ 認知症サポーター養成講座 + a（認知症予防・医療・ケア）の学びの場を地域全体で検討していくこと

が挙げられる。①から④を実現していくためには、キャラバン・メイトだけではなく、地域包括支援センターや市（行政）等との協働していくことが必要になると考えられる。学校や企業で開催を広めていくためには、社会福祉協議会等とも協働が必要になってくる。事例の積み上げや + a の学びの場を検討していくためには、今後、市（行政）、地域包括支援センター、キャラバン・メイトが集まって話し合う機会も必要と考えている。「私たちの地域では何が認知症で課題になっていて、市民に何を伝えていけば良いのか」について、お互いに話し合い、共通理解して今後の認知症サポーター養成講座を展開していくことが求められている。

## 6、おわりに

これまで認知症サポーター養成講座を行ってきて、認知症高齢者を地域で支えていくために認知症サポーターの協力は欠かせない、と改めて感じている。しかし「オレンジリングをもらったなら何をしたら良いのか？」という認知症サポーターの具体的な役割については、まだ答えを見つけれられていない。筆者は、認知症サポーターの役割は個々で変化していくのではないかと考えている。徘徊があり行方不明になる危険性がある人には、外に歩いていた時の見守りや

声かけ、そして捜索への協力などの役割が求められる。一方、自宅に閉じこもりがちな人には、自宅での積極的な声かけ・話しかけが望まれる。このように認知症サポーターの出来ることについては、個々の事例から明らかにしなければならない。認知症サポーターの役割に正解はない。これから各地域で認知症の人との関わりをとおして、答えを作り上げていくことが最も重要であろう。これを行っていくためには、「認知症の偏見をなくし理解を広める」活動を今後も続けていくこと、そしてさらにはキャラバン・メイトや行政、地域包括支援センター等の関係機関が課題を共有し、「私たちの地域をどうしていくのか？」という方向性を明らかにすることが必要なのである。

認知症サポーター養成講座がただのキャンペーンで終わらずに、「認知症の理解が深まる地域に」を目標に、今後も活動を続けていきたい。

## 文献

- 1) 国立社会保障・人口問題研究所 「日本の将来推計人口(平成18年12月推計)結果の概要」 1-1 (2006)
- 2) 全国キャラバン・メイト連絡協議会「キャラバン・メイト養成テキスト 2006年度版」 6-6 (2006)
- 3) 介護支援専門員テキスト編集委員会 「五訂介護支援専門員基本テキスト 第1巻介護保険制度と介護支援」5-5 (2009) 財団法人長寿社会開発センター
- 4) 全国キャラバン・メイト連絡協議会「キャラバン・メイト養成テキスト 2006年度版」 6-6 (2006)
- 5) 全国キャラバン・メイト連絡協議会「キャラバン・メイト養成テキスト 2006年度版」 6-6 (2006)
- 6) 全国キャラバン・メイト連絡協議会 「認知症サポーター 100万人キャラバンの実施状況」(2009)
- 7) 全国キャラバン・メイト連絡協議会 「認知症サポーター 100万人キャラバンの実施状況」(2009)

## キーワード

認知症サポーター    オレンジリング    劇    認知症の理解    地域